

「大谷創造都市計画」展(1)

建築家 神谷 五男(プロデューサー)

〈大谷との出会い〉

私は鹿沼市の生まれであり、大谷石でつくられた蔵は見慣れていたが、私の記憶の中に存在感はいくらもなかった。大谷石の建築としての印象は、大学三年の時である。当時、フランク・ロイド・ライト設計の帝国ホテルの解体が議論されている時期で、見学会に同行し、その時に大谷石という認識を新たにしようと思った。だが、それ程に刺激的な思いはなかった。多分、私にとってあまりにも高級なホテルであり、利用するのにもまだあり当時前面の睡蓮池のきたなさや自分の思っていた建築感と違っていたからだろうと今思う。当時の建築界の中で、私にとって村野藤吾の建築が印象が深かった。道路を挟み、隣接して村野設計の日生会館が出来上がっていた。私は日生会館の劇場に興味を惹かれていたせいもあった。また、その当時に丹下健三の代々木オリンピック競技場の鉄骨が組み上がり、足場だらけの現場見学など、どちろちろと言いつつ、次々と新築され



空から見た大谷地区(緑の下には、巨大な地下空間(採石跡)が眠っている)



奇岩群(大谷地区には、独特な風景が点在する)



Negropolis 計画案(平面図:劇場やアミューズメントセンターが計画された)



Negropolis 計画案模型(地下空間の補強を兼ね備えた工法での構築)



創造都市計画マスタープラン(大谷地区を新たに、環境都市として計画する)



創造都市計画断面図(既存地盤面を掘り下げ地底部分に都市を構築する。また採石坑を利用し大谷独特の空間を整備する)

る近代建築の方が自分にとって建築の知識になっていったと思う。自分が独立してから村野や丹下の影響はかなり強いものがあった。それというのも、当時海外の建築情勢は乏しく、新しくできる建築が何もかも興味の対象であった。自分がつくってきた建築を振りかえるとき、そんな背景が継承されているのに気づかされる。そんな過程を過ぎ、宇都宮に移り住むことになった。そして、「大谷」に出会うことになった。その出会いは大谷在住の友人との出会いである。友人につられられ、何度か地下採石場を見学させて頂いたことがあった。恐ろしくなるような簡単なハシゴ橋の階段。恐る恐る下りた記憶。下りるにつれ冷気の流れる顔を過ぎさって行く。地底に辿り着くと、裸電球の灯が抄にキラキラしていた空間。奥まった空間は霧状につつまれ、ファンタジックな空間。人の吐く息が白濁してみえる。何と幻想的で、冷たさに震えていたことが思い出せる。そして1986年に

大谷の地下空間での世界的に活躍する「山海塾」の舞踏公演である。さらに現代アートの「アンディ・ウォーホル展」(この二つのイベントを通して大谷の地下空間の存在価値は私にとってショックな出来事であった)。大谷に惹かれて、その後、ファッションデザイナー、映像作家と協同し大谷にアーティスト村を建てようという気合が入って、さらに奥深く大谷の台地を探索した。そんな矢先、1990年の第一次陥没が、そして連鎖的に第二次陥没が起きた。落盤はしたものの、地下空間に対する思いは拭拭できず、地下空間の提案をしたのが1994年のNegropolis計画であった。この計画は、地下を利用し、劇場やアミューズメントセンターなどを構築する計画であった。地下空間の補強を兼ねた、トンネル工法の技術を導入し、地下空間を整備して、構築していく方法である。また、劇場については、卵型のシエル構造手法を考慮した一体型のストラクチャーを計画したものであった。その他に、地下空間と地上を関係づけた地下、地上

の連続した空間を楽しめる案も計画された。Negropolis計画案後、私たちは大谷計画は中断をしたままでいた。陥没後、大谷地区の地下採掘場は負の歴史遺産としてレッテルを貼られてしまった状況でした。そして陥没から十数年を過ぎた頃、大谷地区の陥没に対する安全対策が急浮上した。この出来事は私たちに改めて大谷に興味深いものにした実感がありません。行政指導による溶融スラグを使う廃杭埋め戻し案でした。即ち、溶融スラグの捨て場としての最終処分場を兼ねた安全対策手法です。それらを環境庁に特区として申請するという手続きです。溶融スラグとは生活ゴミを焼却した焼却灰を1200〜1300度で溶融し、急激に冷却して精製されるガラス質の砂と思えば良いかと思えます。埋め戻し側の企業体からの工法手法など、大谷地区公民館で何度となく説明が持たれました。私も、その都度、説明の席に同行し、質問もさせて頂きました。溶融スラグという未知の物質、埋め戻し手法、これらに対し、地元住民から疑問が投げかけられ、地元と執行部側とは対立する場面も見受けられたプロセスでした。

その間、私も、行政機関、スラグを売買する業者、有識者、地元有志、ジャーナリズムを通じ、何度となく情報、意見交換をする場を持つことができました。そんな状況を持って、このままでは何の解決策はないという考えに至りました。そして部分エリアではなく、思い切った手法が必要ではないかという考えに至りました。それが、大谷創造都市計画です。この計画は、負の遺産としてレッテルを貼られてしまった地下空間を再利用し21世紀にあっての環境型都市をめざします。大谷創造都市計画の対象エリアは大谷中央地区直径約2kmの範囲を想定します。大谷にあっては部分的な活用でなく、大谷中央地区の都市計画があるべきではないかというのが私たちの基本的な考えです。

神谷五男略歴
1942年 栃木県生まれ
1965年 芝浦工業大学建築学科卒業
1967年 丹下健三に師事
1972年 神谷五男十都市環境建築設計所設立
芝浦工業大学建築学科非常勤講師
宇都宮大学建築学科非常勤講師
足利工業大学建築学科非常勤講師、歴任
主な作品
旧今市市文化会館、佐野市文化会館、マロニエプラザ、コスモホテル、栃木県グリーンスタジアムなど

「足利・桐生」大谷石建築めぐり

NPO法人 大谷石研究会顧問 足利工業大学教授 和田 昇二

少し遅くなってしまうが、昨年6月に実施した「足利・桐生」の研究旅行について報告したい。

「足利・桐生の大谷石建築めぐり」には、大谷石研究会のメンバー22名と足利市在住の羽山弘一さんが案内役として参加。またコースには、桐生のソースかつ丼(昼)と足利の蕎麦(夕食)が入っており、食事も楽しみの一つであった。

小雨の降る中、最初の見学地である桐生市の旧飯塚織物(1932)に到着した。バスで移動し、群馬大学工学部記念会館(1916)を見学。すぐそばにある天満宮境内の骨董市で楽しんだ後、旧金谷レース工場(1919)と有隣館(1843)を1920に立ち寄った。これらの建物は、今もなお市民に利用され、文化財にも指定されている。昼食の

予約時間はとうに過ぎてしまい、急いでバスに乗り込み、ソースかつ丼の藤屋食堂に向かった。今回の足利探訪は、羽山弘一さんの作品を見て廻るのが中心であった。最初の足利東教会では外壁の大谷石はもろろんのこと、祭壇の十字架と大谷石の壁面との調和が見事であった。太平記駐車場に着いた時には陽が差し始め、上着を一枚車中におき軽装でバスを降りた。あまりの日差しの強さに、同行の女性会員は雨傘を日傘にして歩き始めた。マロニエ建築賞(栃木県)を受賞した昌平スクエアを見物し、鏝阿寺の御瀑端を通って「筆や」に寄り道した。何度も足利を訪れている当研究会の人たちにとって、「筆や」は新しい発見であった。鏝阿寺東側の道沿いにあり、昭和初期に建てられたごくありふれた2階建ての民家であった。一階の住まいが展示スペースを兼ねており、さりげなく置かれた幾種類

もの筆は和筆筍や古民具と共に絶妙な雰囲気を出していた。また和服姿の女主人のこまやかな接待も印象に残った。2時間近い鏝阿寺周辺の散策を終え、旧市街地から渡良瀬川に架かる中橋を渡り河南へと移動した。金子邸は洋風の2階建ての大きな住宅で、妻面のファサードは大部分が大谷石で占められていた。金子邸のすぐそばに結婚式場(ブライダルブレイスガーデン)があり、その敷地内にある瀟洒な教会も妻面の外壁が大谷石であった。予定の見学を終えて、明治庵に向かった。蕎麦のほか、ぬか

漬けのお新香と鶏のから揚げが美味しいお店で、皆さん満足され家路についた。今回見学した4つの建物について、設計者の羽山さんから直接話をお聞きする機会を得たことは、参加者にとって誠に幸運であった。同様に、大谷石を建築素材として今なお現代建築の中に生かし続ける羽山さんに、大谷石研究会の一員として頭の下がる思いがした。今後、大谷石を素材とした羽山さんの建築作品が、文化財に指定され永く保存活用されていくことを願っている。



旧飯塚織物。



群馬大学工学部記念会館



旧金谷レース工場



これらの建物は、今もなお市民に利用され、文化財にも指定されている。昼食の

予約時間はとうに過ぎてしまい、急いでバスに乗り込み、ソースかつ丼の藤屋食堂に向かった。今回の足利探訪は、羽山弘一さんの作品を見て廻るのが中心であった。最初の足利東教会では外壁の大谷石はもろろんのこと、祭壇の十字架と大谷石の壁面との調和が見事であった。太平記駐車場に着いた時には陽が差し始め、上着を一枚車中におき軽装でバスを降りた。あまりの日差しの強さに、同行の女性会員は雨傘を日傘にして歩き始めた。マロニエ建築賞(栃木県)を受賞した昌平スクエアを見物し、鏝阿寺の御瀑端を通って「筆や」に寄り道した。何度も足利を訪れている当研究会の人たちにとって、「筆や」は新しい発見であった。鏝阿寺東側の道沿いにあり、昭和初期に建てられたごくありふれた2階建ての民家であった。一階の住まいが展示スペースを兼ねており、さりげなく置かれた幾種類

大谷の民話・史跡あれこれ

多気城運命の日

(NPO法人 大谷石研究会広報担当 柏村 祐司)

多気山は、頂上に戦国時代宇都宮氏によって城が築かれたことから城山とも呼ばれている。城は宇都宮氏の改易によって廃城となるが、次のような話が伝わっている。

ある年の秋、江戸が大火に見舞われたときのことである。多気城から早速早馬にて見舞いの使いが江戸城にやって来た。幕府方では、あまりの早さの見舞いに驚いて早く来られたわけをたずねると、江戸城を見下ろす高い所に城を構えていたので大火を知った旨を話した。これが幕府方の気を咎め、まもなく廃城を命ぜられたという。

現在、多気山の頂上、特に東側に針葉樹が生い茂り眺望が悪い。廃城の話は伝説にしろ、頂上から眺めることが出来たら、関東平野の夜景はそれこそ百万ドル以上のものとなるに違いない。

大切にしますパートナーシップ

印刷技術がいかに進歩しようとも
技術表現の根幹は「心」であると考えます

印刷のご用命は

新光社印刷

株式会社
〒321-0811 宇都宮市大通り2-4-1番地
TEL 028-633-4718(代) FAX 028-637-3981

ホテル サンシャイン

客室：234客室

- ☆宴会 日本料理……松壽苑
- ☆会議 和風居酒屋……餘楽庵
- ☆結婚披露宴 ビアレ스토랑……ジェスタ
- ☆レストラン 予約制レストラン……ステラ

〒321-0953 栃木県宇都宮市東宿郷2-3-1
TEL.028-633-0123(代) FAX.028-633-0122
URL=http://www.sunshine-grp.co.jp